

琉球大学学術リポジトリ

社会学的な新自由主義と自由の世界史的展開

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際地域創造学部 公開日: 2019-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 一之, Ishida, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002011996

社会学的新自由主義と自由の世界史的展開

石田 一之

1. はじめに

本稿は、アレクサンダー・リュストウの代表作『現代の位置づけ』¹における第2巻の内容を中心にして、「自由の世界史的視点からみた展開」として全体を再構成するものである。アレクサンダー・リュストウは1932年、古い自由主義と新自由主義との差異に関する著作『経済的自由主義の機能障害』²を發表し、古い自由主義を批判し20世紀の新自由主義の学派の原理を定式化した。

リュストウは第二次大戦中に16年間滞在し教鞭をとったイスタンブールからドイツに帰国し、1949年から55年まで、ハイデルベルク大学で教鞭を執った後、1955年から死去する前年の1962年まで、社会的市場経済アクチオンスゲマンシャフト³の長の職にあった。彼の政治的立場の特徴は、「中道の人」であり、そのような中道的立場によって、右派と左派の両派の立場にある人々から精神的指導者とされた⁴。

『現代の位置づけ』は1950年から1957年にかけて全3巻において發表されたものである。ここでとられた方法はアルフレッド・ウェーバーの歴史-文化社会学の方向を引き継いだものである⁵。『現代の位置づけ』ではこの方法を引き継ぐことによって、西洋を中心とした世界史のプロセスを、精神的自由と政治的自由とが相互作用する過程として捉えることが可能となっている。

¹ Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart -Eine universalgeschichtliche Kulturkritik , Erlenbach-Zürich, Band 1: Ursprung der Herrschaft ,1950., Band 2: Weg der Freiheit, 1952., Band 3: Herrschaft oder Freiheit 1957.

² Alexander Rüstow : Das Versagen des Wirtschaftsliberalismus,1932.

³ Aktionsgemeinschaft Soziale Marktwirtschaft

⁴ Vgl. Bernhard Vogel: Alexander-Rüstow-Plakette Verleihung am 21.Oktober 2004, Aktionsgemeinschaft Soziale Marktwirtschaft, ASM Bulletin, 2005.,S.24-27.

⁵ Alfred Weber: Kulturegeschichte als Kultursoziologie.(Alfred Weber- Gesamtausgabe. Bd.1),herausgegeben von Eberhard Demm, Metropolis-Verlag, 1997

2. 古代における精神的自由と政治的自由の展開

1) 古代ギリシャ

自由の世界史的展開という視点から重要なことは、古代ヨーロッパにおいて精神的自由と政治的自由が発現したことである。一定の水準以上の文明を形成する高度文化においては一定規模以上の人口の集積と社会の階層構造を形成することが不可欠で、リュストウに従えば、そこでは自由は一般には発現することは困難であるとされる。古代ギリシャでは、対外貿易を基盤とした高度文化が形成され、その経済的基盤の上に精神的自由と政治的自由が発現した。リュストウは、このような西洋の精神的自由の起源を紀元前のイオニアに求めている⁶。イオニアは古代ギリシャに属し、この時代のギリシャ貿易は、東地中海及び近東の全文化圏を包括し、その取引相手はこれらの領域の支配層であり、彼らの支配者収入がギリシャ貿易人に流入した⁷。イオニアの都市国家は、上位におかれた封建的権力を持たず、貴族的大商人の寡頭民主主義によって治められていた。イオニアの自由主義はこれらの経済的基盤と政治的基盤に対する精神的・上部構造として展開されたのである。この時代のイオニアの思想家の精神活動は、何らかの権力者や支配者の指図に従ってではなく、自己の意見に従って、精神の命ずるままに行なわれた⁸。

『イーリアス』から『オデッセイア』に至るホメーロス (Homer) の紀元前8世紀とされる作品内部では社会構造の変化が反映されている⁹。オデッセウス (Odysseus) は、『イーリアス』のアキレス (Achilles) が貴族的勇士であるのに対して、商人的で抜けない好奇心を持った人物として描かれている。また『オデッセイア』は英雄ばかりでなく商人向けとしても書かれており、その雰囲気は港湾都市や貿易都市で、貿易商人の都市貴族らから構成されている。しかしホメーロスの作品は自由精神的なものを示しながらも、同時に明白な貴族的性質を持つものである¹⁰。

リュストウは紀元前7世紀以降にイオニアに現れた思想家並びに科学者達が精神的自由を体現することになったと考えている。紀元前7世紀には、アルキロコス (Archilochos) が現れた¹¹。ホメーロスの封建倫理に対して、アルキロコスは純粋に商業的立場に立ち、ホメーロスの上品さや従順さと対照をなす不従順さや自制心のなさを示した。そして、ホメーロスにみられる貴族的精神と伝統的な封建的文化に対して

⁶ Alexander Rüstow : Ortsbestimmung der Gegenwart , Band 2, S.56. イオニアは、エーゲ海に面したアナトリア半島（現在のトルコ）南西部に古代に存在した地方のことである。

⁷ Ibid., S.56.

⁸ Ibid., S.56.

⁹ Ibid., S.60.

¹⁰ Ibid., S.60.

¹¹ Ibid., S.60.

確固とした対立的立場を提示しているのはヘシオドス (Hesiod) である¹²。ヘシオドスは神統系譜学においてホメーロスの神学に対抗しているばかりでなく、人間学においても対抗している。ホメーロスの純化された形式の封建倫理に対して、ヘシオドスはイオニア民主主義的精神に基づいている。寄生的で強制的な封建制に対して、ヘシオドスは自意識的農民制の自由労働を賛美することにより、人間的労働の農民倫理を、貴族的・怠惰的な封建的労働蔑視と対置させている¹³。ヘシオドスは『農民暦』(Bauernkalender) を作成し、それと並んで農民的な質素で自明、控えめかつ熱心な日々の生活を叙述した¹⁴。

イオニアの精神的自由の潮流は、前 546 年前後に起きたアケメネス朝ペルシャによる侵攻の後しだいに衰退した。リュストウは、イオニアに続いて自由の精神的潮流の担い手の役割を担ったものとして、アテネを挙げる¹⁵。リュストウは、イオニアの精神的自由のアテネへの移植が重要な世界史的意義を持ったとしている¹⁶。イオニアの精神的自由の潮流は、前 546/45 年の崩壊と、それに続いて起こった前 494 年のミレトスの破壊によってその基礎となる土地を奪われていたからである。そしてアテネでは、民主主義的 - 自由主義的な政治を代表するものとして、ソロン (Solon)、クレイステネス (Kleisthenes)、ペリクレス (Perikles) という 3 人の代表的政治家が現れた。

アテネにおいて世襲の王制から選任されるアルコンへの推移は早期にかつ平和的になされたが、その後の金権化された貴族制の展開は、多くの農民的下層を負債、隷属の状態に押し下げることとなり、困難な社会的緊張へつながった¹⁷。前 636-32 年には、この状況を君主制の建設に利用しようとするキュロン (Kylon) の反乱が生じた。この反乱は失敗に終わったが、それに続く社会不安をもたらした。ここに現れた下層民の経済状態の悪化と先鋭な社会対立を改革しようとしたのは、前 594 年に政権を担ったソロンである¹⁸。ソロンは憲法の制定や民主主義化を推し進めた。リュストウによれば、ソロンに見られた特徴として次のような点が挙げられる¹⁹。すなわち彼は、この時代におけるイオニア精神の偉大な代表者に属すること、それと同時にこのイオニア精神を自明にわがものとする方法によってアテネに移植したことである。そしてソロンは、社会構造における支配的要素を意識的に取り除くことによって、支配性と強制の到達しうる最小値に到達しようとした。ソロンの憲法によって作られた基礎は、それに続いたペイシストラトス派の潜主政治の期間においても形式上侵害されなかった。

クレイステネスは反封建主義的な制度改革をなし、合理主義的急進主義の特徴を持

¹² Ibid.,S.62.

¹³ Ibid.,S.62.

¹⁴ Ibid.,S.62.

¹⁵ Ibid.,S.90f.

¹⁶ Ibid.,S.109.

¹⁷ Ibid.,S.93.

¹⁸ Ibid.,S.93.

¹⁹ Ibid.,S.93.

つ。彼は、潜主制の再現の脅威に対して、最も効果的と考えられる、そしてイオニアではすでに導入されていた、陶片裁判 (Scherbengericht) の予防手段を用いた²⁰。

ソロンの制度改革は有機的 - 保守的で節度のあるものであったが、その結果、続く時代に君主制と封建的寡頭制への血なまぐさい転落が生じた。クレイステネスの改革は急進的であり、同時代のイオニア合理主義の中で生まれた政治的闘技場の手段を用いることによって、それは意図された成果をもたらした。クレイステネス以後のアテネにおいては、一時的な中間休止を除いて、君主制並びに寡頭制への転落は生じなかった。

リュストウは、クレイステネスとイオニアとの結びつきを述べている²¹。クレイステネスの合理主義的急進主義は、彼以前においては、非進歩的であったアテネのあるアッチカ地方では育たなかったものである。彼は、イオニアに直接訪問することを通して、その精神的、政治的、社会的発展を吸収するとともに、当時のイオニアの自然科学者や思想家であるアナクシメネス (Anaximenes) やヘカタイオス (Hekataios) らと直接に接触し交流を深めたのである。

その後、アテネの発展が見られたのは、ペリクレスの時代である。ペリクレスは前444年から前430年までの15年間、毎年「将軍職」に選出され、アテナイに全盛時代をもたらした。そこでは憲法と民主主義が高度に発達し、自由と並んで生活水準の均等的形成が広範に見られた²²。

ペリクレスは、貴族制の除去と純粋なもっとも活気ある民主主義の具体化への移行を行った。リュストウによれば、ペリクレスにおけるこの移行的統合は、一回性と再現不可能性という圧倒的な魅力を保持していた²³。しかし当時の民主主義的アテネは、発展の外的頂点におけるいかなる模範もない完全な政治的新創造の課題を伴いつつ、過度の自由と緊張の解けた状態の中でもたらされた危機の状態をも伴っていた²⁴。これはいわば鳥が新しい羽根をつける状況であり、内的弱さと抵抗力のない状況である。この状況のなか、ペリクレスの死後、扇動政治家が現れた。またペロポネソス戦争に敗れたアテネでは、前404年、三十人僭主と呼ばれる寡頭制の政権が成立した。しかしこの中間休止の後、前403年から企図された、熱心に取り組みされた民主主義的刷新の試みは、多くの健全な民主主義への諸力がアテネに存在していたことを示すものであった²⁵。

2) 古代ローマ

ギリシャと古代ローマとの歴史的関係において、リュストウは、西洋の文化的遺産

²⁰ Ibid.,S.99.

²¹ Ibid.,S.96.

²² Ibid.,S.104.

²³ Ibid.,S.126.

²⁴ Ibid.,S.127.

²⁵ Ibid.,S.127.

の継承、精神的自由の連続性が重要と考えている。ローマでは、スキピオ・アエミリアヌス (Scipio Aemilianus) からアウグストゥス (Augustus)、マルクス・アウレリウス (Marc Aurel) に至る政治的指導層には、意識的な古典ギリシャを範とする精神がみられた。リュストゥによれば、スキピオ・アエミリアヌスと彼の同胞者達によって開始されたギリシャ文化の同時代におけるヘレニスティックな形式における受容は、約100年間続き、それはルクレティウス (Lucretius) とキケロ (Cicero) において頂点に達した²⁶。

ローマの歴史はギリシャ文化圏の外部で推移した後、第2次ポエニ戦争でのカルタゴへの勝利 (前219-201年) の後、東方の高度に耕作された土地に戦闘を拡大した²⁷。前196年のアンティゴノス朝マケドニアとの会戦での戦勝に際して、ローマ元老院はギリシャの諸都市を「自由」と宣言する決議をした²⁸。ギリシャの都市国家から形成されるアカイア同盟 (achäische Bunde) は、前168年のマケドニアとローマによるピュドナの戦いでローマを支援したが、前146年には、同じ土地に属するコリントはローマとの開戦に踏み切り、ローマの軍団により占領され、破壊された。そしてそれに続く100年の内にヘレニズムのほとんど全領域がローマの支配下に摂取された。

ピュドナの戦い (前168年) の後、ローマはアカイア同盟に1000人の人質を要求し、その内にはギリシャの歴史家ポリュビオス (Polybios) がいた²⁹。ポリュビオスは前166年にローマに来て、スキピオ家と交際し、スキピオ・アエミリアヌス (Scipio Aemilianus) はポリュビオスからソクラテスらの教義を学んだ³⁰。スキピオ・アエミリアヌスが後に、彼の父たちや養子家族の伝統を継ぎ、彼の時代の最も偉大で成果を収めた司令官となった時、ローマの政治の方向を規定する数十年の間、彼の周りに重要な政治家たちの集団が形成され、このことを通してローマにおけるギリシャ文化の最高水準の受容がなされた³¹。

リュストゥによれば、ローマのギリシャ化の第1の局面の最高潮の政治的具体化がカエサル (Caesar) であり、前44年の彼の死後の空白期の混乱を経てアウグストゥスが現れた³²。アウグストゥスはローマの発展のなかで増大する東洋化的ヘレニスティックな方向に対して2つの「擬古主義」(Klassizismus) を対置させた³³。すなわちローマ自身の過去の最高の理想と価値に新たに頼ること、並びにギリシャ古典作家の理想と価値に頼ることである。この結果、アウグストゥスの時代はまさに溢れるばかりの成果を与え、ペリクレスのアテネ時代と並んで、それまでの歴史上の頂点の1つを形成した。アウグストゥスの文化政策は、東方からの文化の氾濫に対して堤防を対置するもので、それは18世紀まで保持された特殊な西洋的展開にとって、その自己維持

²⁶ Ibid.,S.168.

²⁷ Ibid.,S.167.

²⁸ Ibid.,S.167.

²⁹ Ibid.,S.167.

³⁰ Ibid.,S.167.

³¹ Ibid.,S.167.

³² Ibid.,S.169.

³³ Ibid.,S.169.

および自己更新に対して重要な意味を持つ精神史的作業であった³⁴。

西洋の文化遺産、精神的自由の連続的継承の観点から重要な概念として、「古典」(Klassischen) の概念を挙げるができる。リュストウによれば、「古典」の概念は、アレキサンドリア市民によって最初に創造、定義され、そこで最初の構成的ヒューマニズムが形成された³⁵。アウグストゥス派の第2のヒューマニズムは、古典的価値をこの模範者に頼った³⁶。「古典」の概念は、古代ギリシャの文化遺産を中心に、総合的に1つの形象にまとめ上げられたものを指し、アウグストゥスの時代に形成されたこの「古典」の象は、後の2000年間に及ぶ西洋の精神史に刻印をなすもこととなった³⁷。それはその後、18世紀の後半以来、ドイツ古典派(deutsche Klassik)の新人間主義(Neuhumanismus)における「古典-ギリシャ自身への新たな立ち戻り」に際しても模範を与えたものである³⁸。ここにアテネ、スパルタ、テーベ、マケドニアなど諸国の間には成功しなかった総合が、古代ローマにおいて最も成果のある方法において遂行されたのである。

アウグストゥスに続く時代には、社会的調節を内包する教義として新ストア主義が普及した³⁹。新ストア主義の下方に向けてのプロパガンダは巡回牧師によって運搬され、キリスト教の倫理と近似し、その急進的な倫理的要求は皇帝や官吏側からみれば非常にやっかいなものであったので、哲学者に対する警察の手入れにまで至った⁴⁰。ストア主義者セネカ(Seneca)は皇帝ネロ(Nero)の教育者並びに宰相となり、このことは哲学の王位の方角への最初の進撃を意味したが、後にセネカは失脚し、その後ヴェスパシアヌス(Vespasian)のもとで哲学者の一般的追放が起こった。しかしネルヴァ(Nerva)期において、新ストア主義が次第に承認され、「支配的な帝国の意向」となった⁴¹。ハドリアヌス(Hadrian)以来、皇帝は哲学者の髭をつけるようになり、マルクス・アウレリウスは、解放奴隷であり彼によって尊敬された師、エピクテトス(Epiltet)の主張した線に沿って、みずからの主張を展開した⁴²。

精神的領域から社会構造に目を移すと、リュストウによれば、ギリシャのポリス的社会構造と同じ社会構造が、紀元2世紀頃のローマにおいて、形を変化させた関係の下で大きく普及していた⁴³。すでにアウグストゥスの時代において、ローマ帝国は、まさに「自己統治する都市の連合」⁴⁴になろうとしていた。また2世紀のローマ帝国は、都市国家の巨大な連邦の像を提供するものであった。そこでは都市の管理は、基本的

³⁴ Ibid.,S.169.

³⁵ Ibid.,S.170.

³⁶ Ibid.,S.170.

³⁷ Ibid.,S.170.

³⁸ Ibid.,S.170.

³⁹ Ibid.,S.171.

⁴⁰ Ibid.,S.171.

⁴¹ Ibid.,S.172.

⁴² Ibid.,S.172.

⁴³ Ibid.,S.172.

⁴⁴ Ibid.,S.172.

に地方自治体自身に委ねられていた。個々の経済的、並びに社会的問題の解決に当たって、あらゆる都市は、その地域的自己管理の権限を有し、都市を越えて存在した強力な中央政府は、国家的業務としての対外関係、軍事、財政などを行っていた。帝国の官僚は非常に稀な場合以外は各都市の地域的業務に介入しなかった。都市の規模は例外を除いて小さな都市であって、閉じられた概観しうる生活領域を形成していた。都市の広範な行政的自立性は、中央集権的絶対主義に対する非常に望ましい対抗物を形成し、それによってさらなる持続的解放の要求は見いだされなかった⁴⁵。

経済的・社会的領域において、これらの皇帝は、小経営と所有の平衡的分散を助成した⁴⁶。ハドリアヌスは、農業において小農業経営を要求し、小作人の地位を所有者の地位に近づけた。また小経営者に対して炭坑を賃貸するシステムを、大経営者による奴隷と囚人を使用するシステムにかわって持ち込んだ。トラヤヌス (Trajan) 以後マルクス・アウレリウスまでの2世紀に出現した皇帝は「強者に対して弱者を、富者に対して貧者を守る」原則を採用し、この原則はハドリアヌス帝期にその現実の発現の場を見いだした⁴⁷。このように紀元2世紀のローマは、「王位についての哲学者達の世紀」⁴⁸であったのである。

3) 古代の没落

リュストウは、「古代ローマ帝国においては、当時の西洋の文化的人間性にとって非常に幸運な状態の継続と非継続は、王位継承という単なる偶発時に全面的に依存していた」⁴⁹と述べている。すなわち、あらゆる模範と十分な遺産のもとにおいても、今日の視点から、あらゆる民主主義的統御の中心点にあるべきものが欠如していた。特に間接民主主義に関する組織技術の欠如は、ローマ帝国における構成的欠陥であった⁵⁰。このことによって、ローマ帝国においては民主主義的なものが、時代を通じて活気に満ちて存在しながら、それは善き意志と原則の内にのみ、危なっかしい方法において保持され、同時に全く制度的保証を持たなかったのである。従って、もしもそれ相応の素質を備えた皇帝が出現した場合、本人にとってはより快適で、楽しみの多い専制主義 (Despotismus) への道が常に開かれていた⁵¹。

紀元180年のマルクス・アウレリウスの死後、初期ローマ帝政時代の君主制への滑り落ちが決定的に生じた。リュストウによれば、コンモドゥス (Commodus) の統治はすでに専制政治としての側面を多く持つものであったが、軍人皇帝の典型はセプティ

⁴⁵ Ibid.,S.172.

⁴⁶ Ibid.,S.173.

⁴⁷ Ibid.,S.173.

⁴⁸ Ibid.,S.173.

⁴⁹ Ibid.,S.181.

⁵⁰ Ibid.,S.183.

⁵¹ Ibid.,S.183.

ミウス・セウェルス (Septimius Severus) に始まる⁵²。軍人皇帝においては軍隊が唯一の確実な権力の源泉となる。兵士の給料はセウェルスとカラカラ (Caracalla) のもとで明白に上昇し、それに応じて都市住民の租税負担も上昇した。この時代において、社会の階層構造において新たな階層構造の形成がみられた⁵³。従来の特権階級、教養ある都市の市民、土地の所有者は、軍隊によって彼らの従来の特権を奪われ、しかし公的義務からは解放されなかった。彼らは、彼ら自身の租税負担のみでなく、彼らの領域内に住む下層民 (humiliores) の租税も負担した。下層民はこの目的のために領土に結びつけられるか、強制ツンプトに集中された。リュストウによれば、このような税の固定化を伴って、アウレリアヌス (Aurelianus) 期以降、世襲的国家奴隷を伴った階級国家 (Kastenstaat) が生じた⁵⁴。この国家の基礎は下層民の強制労働と土地所有者の強制責任制によって形成されていた。帝国住民の福祉および租税力は継続する外的並びに内的戦争で引き下げられた一方、俸給つり上げと臨時給与による軍隊の計画的買収の政策の故に国家の財政需要はさらに高まった⁵⁵。貨幣の改悪を伴う通貨政策は物価の高騰をもたらした。

3. 中世における精神的自由と政治的自由の展開

1) 古代から中世への西洋の文化的遺産の継承

全中世を通じて、西洋の文化的遺産の継承、精神的自由の連続性が見られた。ギリシャと古代ローマ帝国の達成した2つの偉大な世界史的業績としての、西洋の精神的自由の遺産の引き継ぎの役割を中世を通して唯一果たしたのはローマ教会であった⁵⁶。古代文化のすべての伝統がキリスト教と両立可能であったわけではないが、多くのものはキリスト教修道士の複製本の中で伝達されるなどの方法で継承、保持された⁵⁷。ここにはまたローマ教会が、西ローマ帝国の異民族の侵略による崩壊に際しても同時に崩壊せず存続し得た理由も存在した。教会が神聖ローマ帝国の勢力に対抗して、全ヨーロッパにまで勢力を拡大し得た最大の理由は、これらの精神的・文化遺産を唯一保持する主体であった点に求めることができるのである⁵⁸。

リュストウは、教会と国家の双方向的な独立性が、宗教改革まで続いた基本的構造として社会を規定し続けたとしている⁵⁹。そして彼によれば、この二元論、すなわち権力の分割は、全中世を通じて、西洋の人間性に自由を保証し続けたものであった⁶⁰。

⁵² Ibid.,S.183.

⁵³ Ibid.,S.184.

⁵⁴ Ibid.,S.185.

⁵⁵ Ibid.,S.185.

⁵⁶ Ibid.,S.232.

⁵⁷ Ibid.,S.232.

⁵⁸ Ibid.,S.232.

⁵⁹ Ibid.,S.231.

⁶⁰ Ibid.,S.231.

2) キリスト教と教会

紀元 180 年を境にして、ローマ帝国の状態はより悪化したのであり、社会の支配構造を強める圧力はより強まり、教養ある貴族の上層も都市奴隷に押し下げられる事例が生じた⁶¹。下層民の宗教的状況が教養ある層にまで及び、これらの層において古典主義的一般教養は、平衡力としてはもはや十分には作用しなくなった。ここに救済宗教を求める動きが生じた⁶²。

皇帝の側でも自己神格化を通して、自らの立場を宗教的に固めることが、コンモドゥス以来ほとんど慣例となっていた。ヘリオガバルス (Heliogabal) は自らにシチリアの太陽王の名を与え、コンスタンティヌス 1 世 (Constantin) は太陽神・ヘリオス (Helios) と自ら命名した。王位に関しても神学的統合への必要性が生じていた。宗教の強く拘束し、社会を溶接する力を国家の支配下におくことが、現実の地上の国家の統合力が機能障害を強めるなかでますます求められたからである。そこから国家によって正教 (Rechtgläubigkeit) の概念が引き受けられ、それに対する補充として異端 (Häresie) の概念が生じ、そこからの帰結として、異教徒の国家的迫害が生じた⁶³。

ローマ帝国における正教の実施は、はじめはデキウス (Decius) によって開始され、ディオクレティアヌス (Diocletian)、とガレリウス (Galerius) までの後継者においては非キリスト教の形態において、コンスタンティヌス 1 世 (Constantin) 以降はキリスト教の形態において実施、強制された⁶⁴。

帝国分裂後の西ローマ帝国が、ゲルマンの異邦人の進撃の下で崩壊した後、その後継者の役割を果たしたのはローマの教会であった⁶⁵。東方においては皇帝は、新しい魔力的な手段を用いて皇帝教皇主義的方法で、社会の統合を手中にもたらしことに成功していた。これに対して西方では、教会が、ローマ司教の指導の下、その自立性を意識的に保持した。皇帝自身の居住地がコンスタンチノーブルに移されたばかりでなく、彼に従属する西ローマの統治者達の場所もミラノ及びラヴェンナに移されたことに伴い、多くの伝統的特権がローマに居住する教会側に留められ、このことを通して漸次、西教会の承認された領主としての教皇となった⁶⁶。

ミラノの司教アンブロジウス (Ambrose) は、卓越した人格性を備え、超世俗権力の代表者として、ローマ皇帝自身に非難的に対抗し、紀元 390 年には、皇帝テオドシウス 1 世 (Theodosius I) のテッサロニキの虐殺 (Blutbad von Thessalonike) に対し、教会規定贖罪 (Kirchenbusse) を課すことを強行した⁶⁷。これに対して、アンブロシウスの受洗者であり文学者であるアウグスティヌス (Augustin) は、「正義なくしては、それ

⁶¹ Ibid.,S.202.

⁶² Ibid.,S.202.

⁶³ Ibid.,S.205.

⁶⁴ Ibid.,S.205.

⁶⁵ Ibid.,S.230.

⁶⁶ Ibid.,S.230.

⁶⁷ Ibid.,S.231.

は大強盗団の国家にすぎない」という力強い言葉を発した⁶⁸。このようなアウグスティヌスの言葉は、国家に対するローマ教会の自立性並びに独立性に基づいてのみ可能となったものである⁶⁹。

3) ゴシック様式とルネッサンス

中世において、修道院付属学校においてなされていた生の芸術としての書簡、計算、合理性は、素人の間にも浸透し、商業活動はそれに応じて組織的並びに勘定的に合理化され、同時に外部との関係では、交通の安全、迅速性と法的安定性が増大する中で、北イタリアとライン川とセーヌ川の間地域において、10世紀以降、それまで遍歴していた商人が定住へと移行し、都市的生活を開始した⁷⁰。このことは司教区の首都などのあった交通の結節点においても現れた。このようにして新しい居住ゲマインシャフトとしての領土的連合体が形成された。司教領域の支配者の支配要求は、商人達の自由権と強い対立関係を引き起こし、商人からなるギルドは、不自由な手工業者からなる全居住者をまとめ上げ、都市支配に対する自由の戦いを展開した。この戦いにおける勝利は自由な帝国直属の都市を作り上げた⁷¹。遠くにいる皇帝や王の統治権は、初期には自由の保証として作用し、それ以降は自由の侵害として感じられるようになった⁷²。

これらの都市の自己統治体制は、当初は貴族的な市参事会の家柄による寡頭政治であった。しかしまもなく手工業者-同業組合による、これらの家系に対する戦いという形で民主主義の方向への展開が生じた⁷³。この方向への展開は統治に関与する市民の領域をさらに拡大した。同時に教会から布告されたパックス・クリスチアーナ (Pax christiana) に基づき、国際的遠隔地貿易が発達し、それは網状にあらゆるこれらの都市を互いに結合し、この結びつきを近隣の地方やさらには極東にまで拡大した⁷⁴。これらの都市は、あらゆる高次の文化の典型的な成立空間となり、十分に多数の専門家と十分に緊密な共生が可能となっていた。

このような社会学的基礎から、ゴシック様式の時代には、中世都市の文化が生じた⁷⁵。それは教会や大聖堂の天空を目指した崇高さ、祭壇の絵画、輝く教会の窓からなるものであり、同時代においてスコラ哲学の科学的かつ神学的な大業績が生み出された。そしてゴシックの様式とスコラ哲学と間にはスタイルの近親性が指摘されうるのである。

⁶⁸ Ibid.,S.231.

⁶⁹ Ibid.,S.231.

⁷⁰ Ibid.,S.247.

⁷¹ Ibid.,S.247.

⁷² Ibid.,S.247.

⁷³ Ibid.,S.248.

⁷⁴ Ibid.,S.248.

⁷⁵ Ibid.,S.249.

リュストウは、ルネッサンスを除いた中世文化業績においても、古代の遺産が作用していた点を指摘している⁷⁶。しかし彼によれば、全中世が受けた古代の影響は、ナイーブかつヘレニズムの種類のものであり、反省されない、同時に発展の形式において現れたものであり、意識的に古代ローマ（アウグストゥス時代）の古典主義の形式において取り入れられたものではない⁷⁷。すなわち中世は古代を、「通俗的古代」⁷⁸として継承したのである。

一方、リュストウによれば、ルネッサンスは、意識的に本源的な「古典古代」に拠ろうとした⁷⁹。イタリアにおいてのみこのような発展が遂行された。イタリアにおいてもまず、中世都市文化の全西洋的な展開が生じ、この西洋に共通の中世の都市文化に付け加える形でルネッサンスは展開された⁸⁰。このことが可能となった理由は、イタリアの当時の諸都市が、ドイツの諸都市などと比較しても、大きな自由を享受することが可能であった点にある⁸¹。リュストウによれば、その都市の状況において、かつてのアテネや、紀元2世紀の古代ローマの都市とも類似の社会学的状況が再現されていた⁸²。それによってルネッサンスは、中世初めのゴシック様式の全西洋的展開から、時の経過とともに分岐しえたのである。

4. 政治的不自由への対抗と革命

1) 農民反乱と封建領主に対する闘い

14世紀には、社会革命的性格を持つ農民暴動が1323年にフランドル地方において勃発し、その後急速に広まり、農村に接する都市の地方支配者は追放された後、5年後の1328年にこの動きはフランク帝国の王の軍事的干渉によって鎮圧された⁸³。それに続いて1356年、隣接する北フランク帝国において、ジャックリーの乱が、1381年にはイングランド南部でワットタイラーとジョンポールの農民反乱が起きた。それから1419-26年には中央ヨーロッパでフス戦争が生じた。15世紀中葉以来、南西ドイツ、ザルツブルグなど各地で暴動が生じ、それは1524-25年の大ドイツ農民戦争で頂点に達した。

下層民による上層領主に対する抗争の代表的な事例として現代の北ドイツ、デイトマルシェン (Dithmarscher) の農民の事例を挙げることができる⁸⁴。彼らは、1227年ボルンヘーブト (Bornhöved) の戦いへの参加を通して、彼らの古い土地の自由の確認に

⁷⁶ Ibid.,S.251.

⁷⁷ Ibid.,S.251.

⁷⁸ Ibid.,S.251.

⁷⁹ Ibid.,S.251.

⁸⁰ Ibid.,S.251.

⁸¹ Ibid.,S.251.

⁸² Ibid.,S.252.

⁸³ Ibid.,S.393.

⁸⁴ Ibid.,S.394.

至った。そして貴族に対してその特権の放棄を要求し、数多くの攻撃に対して抗戦し、1259年に彼らの民主主義は、政治的に独自の自治を行う農民共和国に到達した。また同じようにスイスでは、1291年の3つのヴァルトシュタット (Waldstätte、原初三州) の結合以降、「農民的原州」(bäuerliche Urkantone) が現れた⁸⁵。

リュストウによれば、中世を通じて生じた農民反乱と暴動のうちの2,3のものはウィクリフ (J. Wycliff)、フス (J. Huss)、ルター (M. Luther) らの教義に関連していたとともに、すべてのものは当時の慣習法をその正当性の根拠とした。そしてこれらの慣習法は、さらに、当時の神学的 - 聖書的形態をとった自然法 (Naturrecht) によって規定されていた⁸⁶。人々は、そこから封建的支配性の根本的否定という原理を引き出し、同時に急進的な種類の民主主義の目標設定をも伴っていた⁸⁷。中世を通じて、封建領主間の戦いと並んで、社会の下層からの封建領主に対する闘いは、成果があるなしにかかわらず数多く見られたが、リュストウは、これらの自由の戦いは、そこに革命的性格を指摘することが出来るが、近代の領地国家的絶対主義の支配性に対する自由の戦いにおいて生じた革命とは区別されるものである、と述べている⁸⁸。

2) 啓蒙主義と絶対主義

17、18世紀を通して、西洋の精神史の上では啓蒙主義の間断なき前進と支配が見られた。同時代に政治的領域を支配していた絶対主義は、この精神史上の動きと正面から対峙しなければならず、それ自身で啓蒙主義と連なるものとして、「啓蒙された絶対主義」へと展開した⁸⁹。リュストウによれば、絶対主義の革命的克服は、事実上の成果として、あるいは結果倫理の意味において、啓蒙主義に関連するが、初期の啓蒙主義においては、絶対主義との近親性を意識し、多くのものを啓蒙するよりも1人を啓蒙する方が遥かに容易で急速になしえることであり、信条的絶対主義から啓蒙された哲学的絶対主義への進歩をそれ本来の目的の形で内包していた⁹⁰。このような「領主の改宗」はフリードリヒ2世 (Friedrich II) やヨゼフ2世 (Joseph II) の場合において現実に達成された。このような自然法的に啓蒙された絶対主義を頂点として伴った共和国が、啓蒙主義が当初、志向していた政治的理想であった。

⁸⁵ Ibid., S.394.

⁸⁶ Ibid., S.393.

⁸⁷ Ibid., S.393.

⁸⁸ Ibid., S.394.

⁸⁹ Ibid., S.396.

⁹⁰ Ibid., S.396.

3) イギリス革命

イギリスではすでに農業関係の社会的に基本的な発展は、大陸とは本質的に異なっていた。1381年のイギリスでの農民の蜂起は、それから150年後に起こったドイツの農民戦争の時と同様に、鎮圧された。しかしこれら農民の蜂起が以後にもたらした帰結は、ドイツとイギリスでは大きく異なっていた⁹¹。ドイツでは、それは大規模な下層農民の形成を通して、先鋭化された社会下層への圧力を形成したのに対して、イギリスではそれにかかわって、農民を、牧草地並びに小作地の双方において、耕地の管理者へと移行させる動きが生じた。その結果、大陸的な農民の抑圧にかかわって、イギリスではその解放と放逐が現れた。前者は農奴身分から解放され、自立していった自作農民の層であり、後者はとりわけ、耕地農耕とは対立的に最小数の依存的労働力のみを伴う羊の放牧を通して条件付けられたものであり、多くの者が都市へと追い立てられた。

イギリスでは、古くからほとんど定着させられた都市的「自由」の進行もかかわらず、スチュアート朝による絶対王政が16世紀において大きく前進させられた。ここで王政にとって命取りとなったのは、カトリック化とフランス化という2傾向を絶対王政が同時に推し進めたことにある⁹²。

絶対王政に対する古くからの都市的対立者は、カルヴィニズム的ピューリタニズムの反浪費性を特徴として持つとともに、時代とともに金権主義的に富を蓄えた階層ともつながりを持っていた。それに対して宗教的並びに国家的な傾向を持つ君主の行動は、プロテスタントイズムの内部において様々に分派していた信条的諸集団に、共通の敵に対峙する統一を与えた。そしてその敵対性の1642年の噴出が、第1英国革命を開いた⁹³。

第1英国革命は1642年ストラフフォード伯爵(Grafen Strafford)の処刑によって開かれ、1646年の君主チャールズ1世(Karls I)の処刑において頂点に達した後、1649-58年にクロムウェル(Cromwell)の独裁が現れた。1658年のクロムウェルの死後、1660年に同じスチュアート朝からの王、チャールズ2世(Karl II)による王政復古と、その後継としてのジェームズ2世(Jakob II)の即位が行われた⁹⁴。1688/89年の第2英国革命は、迅速で血を流さない方法において遂行された。ここでは国家統一の不可欠の形態としての合法化された君主制として1688/89年にウィリアム3世(Wilhelm III)が現れた⁹⁵。ウィリアム3世には、宗派的に多様に分裂した国民内部で宗派的一時停戦を保障する役割が与えられ、この状況から英国の立憲主義が生じた⁹⁶。それとともに、

⁹¹ Ibid.,S.400.

⁹² Ibid.,S.400.

⁹³ Ibid.,S.401.

⁹⁴ Ibid.,S.401.

⁹⁵ Ibid.,S.401.

⁹⁶ Ibid.,S.401.

そこから均衡のとれた、そして持続可能な新しい状態の創出がもたらされた⁹⁷。

この早期の、17世紀の宗派对立から直接的に生じた絶対主義的自由の克服を通して、英国はヨーロッパの政治的発展においても精神的発展においても先頭に立ち、2つの関係においてフランスのルイ14世を追い越し、精神的生活のあらゆる領域において、英国は大きく突出して先頭を獲得した⁹⁸。

リュストウは、17世紀の英国の2つの革命の原因として、信条的-宗教的理由と政治的理由を挙げている⁹⁹。信条的-宗教的理由とは、数多くの宗教的方向を一時的停戦に向かわせたことであり、政治的理由とは、憲法的に制限された王の最終的復位がなされたことである。そしてここにおいて精神的自由は、むしろ革命の最終的成果としてもたらされた¹⁰⁰。但しこの時点において精神的自由の主張をなしたものとして、ジョン・ミルトン(John Milton)による、「法と公的理性による支配への要請」が存在していた。そしてリュストウによれば、1672年のチャールズ2世(Karls II)、1687年のジェームズ2世(Jakob II)による「信仰自由宣言」と1689年の「信教自由令」は絶対主義的信条主義の側がもたらしためざましい成果であり、これらの成果がまもなく啓蒙主義の側にも精神史的作用をもたらし、イギリスの啓蒙主義は、絶対主義の段階を通り過ぎ、哲学と認識論の段階においてはロック(J. Locke)とヒューム(D. Hume)が神学的-形而上学的教条主義を根本的に崩壊させ、国家理論においてもロックによる最初の立憲制の理論化がなされた¹⁰¹。

4) フランス革命

フランスはルイ14世(Ludwig XIV)の政権時の中頃にはその固有の世俗的発展の最高点に到達したが、その国家と社会の形態は啓蒙されていない信条的絶対主義であった。18世紀前半においても、フランスは一般的な精神的並びに文化的展開において、あらゆる大陸諸国の頂点に立ちながら、政治的には最も後退していたとすることができるものであった¹⁰²。

この精神と政治の間の矛盾は1774年、ルイ16世(Ludwig XVI)の即位によって除去されうるものに見えた¹⁰³。すなわちルイ16世によるテュルゴー(Turgot)の登用は、長く時機を逸していたフランスの啓蒙された絶対主義への移行を、平和的方法において完遂する最高の機会と見られた。しかしテュルゴーは1776年まで在職したものの、彼の改革は特権階級の反対に合い、その諸改革は一部は実行されないままであり、一

⁹⁷ Ibid.,S.401.

⁹⁸ Ibid.,S.403.

⁹⁹ Ibid.,S.400.

¹⁰⁰ Ibid.,S.400.

¹⁰¹ Ibid.,S.402.

¹⁰² Ibid.,S.403.

¹⁰³ Ibid.,S.404.

部は実行されたものの再び以前の状態に戻された¹⁰⁴。このようにテュルゴーのような博識のある改革者が、全くその政治的有効性を開始できなかったことは、当時のフランス絶対主義の持続不可能性を示すものであった。

イギリス革命において見られた激しく対立する傾向を持つ2つの動きは、ピューリタンのブルジョア的感情と絶対主義であったのに対し、フランス革命の場合は、リュストウによれば、対立する動きの1つは市民性によって駆り立てられた啓蒙主義であり、その反対の動きは、絶対主義というよりはむしろ封建主義であった¹⁰⁵。フランスにおいては封建主義は、1683年から1788にかけての絶対主義の弱化的後、再びその敷地を回復していたのである。また、封建主義の除去と並んで、フランス国民の動きを動機づけた政治的目的として、国家管理と財政管理の改革の遂行があった。それは租税と財政改革、国家管理の近代化、国内関税の生き残りとし生業の自由の制限の破棄などを内容とするものであった¹⁰⁶。

1789年8月、特権者階級による特権の荣誉ある原則的断念と、人間と市民の権利の宣言によって、革命はその最高点に至ったと同時に、少なくともその基本的目的に到達した¹⁰⁷。フランスの市民を指導した精神は、当初はロックとモンテスキュー(Montesquieu)によって代表される自由主義がその役割を担ったが、その後、それはホブズ(Hobbes)とルソー(Rousseau)に、そしてルソーの「社会契約」の中に主張されている全体主義に引き継がれた¹⁰⁸。このような革命の指導的精神の移行は1788年の秋以来開始されたもので、その時点において急進的な時事評論家の何人かが、明示的に、モンテスキューと彼に結びついた抑制主義に背を向け始めたのであった¹⁰⁹。ロベスピエール(Robespierre)の政治的実践は、このような精神的潮流の上に位置づけられるものであり、彼の全体主義国家は、ルソーの理論の基礎の上において初めて実現したものである。リュストウによれば、それはデマゴギー、テロ、略奪、人間における獣性とその最も低位の本能へのアピール、あらゆる自然的並びに道徳的絆の解体などの随伴現象を伴った¹¹⁰。

フランス革命では、性格も目標の方向も両極に対立する2つの局面が並立している。すなわち1789年から1792年までの自由主義革命と1792/93以降の全体主義的革命である¹¹¹。ここにおいて世界史上の転換点としては、常に主張される1789年に対して1792/93年が、第1革命が破られ、第2の全体主義的革命が開かれた年として重要である。そしてここにおいて真実には2つの革命が取り扱われているという点において、1世紀前における英国の動向と同じであり、但し、中間点に当たるものが、英国の場

¹⁰⁴ Ibid.,S.405.

¹⁰⁵ Ibid.,S.410.

¹⁰⁶ Ibid.,S.410.

¹⁰⁷ Ibid.,S.420.

¹⁰⁸ Ibid.,S.422.

¹⁰⁹ Ibid.,S.422.

¹¹⁰ Ibid.,S.422.

¹¹¹ Ibid.,S.423.

合ほど明確ではない¹¹²。

リュストウは、後の時代に対して宿命的に作用したこととして、フランス革命におけるこれらの2つの両極の互いに対立する局面を、休止のない連続したものとして捉えるようになった点を挙げている¹¹³。彼によれば、それによってフランス革命の二層性が歴史的統一として感じられる作用をもたらした。それによって第2局面のテロリストティックな局面が、理想主義的な第1の自由主義的局面的影響と共に装飾されることとなったのである¹¹⁴。

5. 西洋における精神史的潮流の連続性

リュストウは、精神的自由を内に保持する精神史的潮流が西洋の歴史のなかで連続的に保持された点こそまさに重要であると考えている。そしてこの西洋の精神史的潮流の連続性の視点からは、それを可能とした要素として「構造的多様性」(Strukturverschiedenheit)が重要な役割を果たした¹¹⁵。精神的自由を保持する西洋の精神史的潮流に現れたさまざまな思想の体系は、多かれ少なかれ、実証的-現実主義的な要素と形而上学的-理想主義的な要素を両極的要素として保持していた。前者を代表するのがアリストテレス-エピクロスの思想の系譜であり、後者を代表するのがプラトン-ストア主義の系譜である¹¹⁶。これらの思想体系の各々が、精神史的後続作用をもたらす形で歴史上に互いに交代して現れた。例えばストア主義は、神学的-形而上学的要素を保持しつつ、キリスト教との総合が不可能な、それと競争する関係において存在したがゆえに、キリスト教に先行したかたちで、紀元2世紀にはローマ帝国の国家宗教として取り入れられることが可能であった¹¹⁷。

アリストテレスの思想はキリスト教と親和性を持ったがゆえに、中世以来、盛時スコラ哲学においては事実上、そして唯名論的後期スコラ哲学においては少なくとも形式上、神学的正教の内部に取り入れられることによって、教会による西洋の精神的遺産の保持の上で役割を演じた¹¹⁸。それに対してプラトンの思想は、一部を除いて教会の立場からは非常に危険なものとして排除され、罰則を設けて禁じられた。しかしまさにこの異教的熱狂の力が、ルネッサンス期の空想的-神秘的-自然哲学を呼び起こした¹¹⁹。ストア主義は、16世紀末から17世紀中葉にかけて、ヒューマニストや教養人によって初めは文献学的理由から取り上げられるようになり17・18世紀においては大きな精神的影響を与えるようになった¹²⁰。ストア主義の影響はしばしば匿名的に

¹¹² Ibid.,S.424.

¹¹³ Ibid.,S.424.

¹¹⁴ Ibid.,S.424.

¹¹⁵ Ibid.,S.375.

¹¹⁶ Ibid.,S.375.

¹¹⁷ Ibid.,S.376.

¹¹⁸ Ibid.,S.376.

¹¹⁹ Ibid.,S.377.

¹²⁰ Ibid.,S.377.

現れたのであり、啓蒙主義における固有の宗教としての理神論 (Deismus) は、古代ストア哲学の近代における更新であった¹²¹。啓蒙主義における「自然」「理性」という基礎概念はストア主義に由来するものであり、その点からは経済学の創始者アダム・スミス (Adam Smith) もストア主義者であったとすることができる¹²²。ストア主義がキリスト教と本質的に対立する点は、世界や人間性の把握における理想主義的なオプティミズムであり、それはルターやカルヴァンが先鋭化したキリスト教の罪悪的ペシミズムとは反対のものであり、啓蒙主義のオプティミズムはこの古代のストア主義の起源に由来しているのである¹²³。

6. おわりに

世界史のなかで、西洋の歴史においては、古代、中世、近代を通じて政治的自由の発現が見られた。これを可能としたのは、西洋の精神史的潮流からの作用であった。精神的自由は、古代ギリシャ・イオニアにおいて生じ、その後、古代ローマにおいては新ストア主義が、中世においてはキリスト教が、政治的自由の成立の上で重要な役割を果たした。また近代以前の革命的動きに関しては慣習法並びに自然法が、近代の革命期においては、イギリスではピューリタニズムが、フランスでは啓蒙主義が政治的自由を実現させる精神史的基礎を提供した。そして精神的自由の連続性の視点からは、古代、ルネッサンス、啓蒙主義、ドイツ古典派という精神史的潮流がその中心をなすものであった。西洋の精神史的潮流においては、政治的自由に向かわせる、自由の「解放する力」としての精神的自由の内容が連続的に保持され続けたことが重要であり、それが政治的自由を継続的に実現させる契機として作用したのである。

¹²¹ Ibid.,S.378.

¹²² Ibid.,S.379.

¹²³ Ibid.,S.379.